

鴻山文庫蔵映画フィルムの再生とその研究報告

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

213

(終了ページ / End Page)

224

(発行年 / Year)

1989-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020406>

鴻山文庫蔵映画フィルムの再生とその研究報告

1、研究の目的

法政大学が一九七六年(昭和五十一年)に江島伊兵衛氏(一八九六―一九七五)のご遺族から寄贈を受けた能楽コレクション「鴻山文庫」には、江島氏が一九三二年(昭和七年)から一九三五年(昭和十年)にかけて撮影された映画フィルム約五〇巻が含まれている。

華麗かつ強靱な技で一世を風靡した先代梅若万三郎(一八六八―一九四六)、堅実にして気品高く、宝生流の双壁と称えられた松本長(一八七七―一九三五)・野口兼資(前名政吉。一八七九―一九五三)、鮮烈な技で聞こえた金剛右京(一八七二―一九三六)、変幻自在の技が冴えた先代喜多六平太(一八七四―一九七一)、秀麗な先代観世左近(一八九五―一九三九)、不世出の名脇師宝生新(一八七〇―一九四四)など、近代の能の黄金時代を築いた名手たちの舞台姿を伝える貴重な記録である。

江島伊兵衛氏は幕末から続く老舗へわんや書店を経営し、宝生流謡本をはじめとする各種の能楽図書を精力的に出版する傍ら、戦後は能楽の三役養成にも尽力された功労者であり、昭和

十年頃から私財を投じて古今の能楽資料を蒐集して「鴻山文庫」と名付け、広く資料を公開し、調査・研究を推進された研究者でもあった。

一九三二年、当時三十八歳の江島氏は、舞台芸術の宿命とはいえ瞬時に消える名人たちの至芸を、永く映像にとどめたいと決意し、ご自分で十六ミリフィルムに撮影された。また国産のカメラはなく、コダック社の機械を使い、フィルムも高価な輸入品の時代である。各演目とも型所を中心とした三分前後、長くても五―六分の映像で、しかもサイレントであるが、一九三五年に野上豊一郎博士が監修した最初の能のトーキー映画「葵上」に先立つこと三年、現存する能のフィルムでは最も古く、文化財的価値もきわめて高い。

江島氏は自然の舞台を尊重し、特別な照明も加えず薄暗い舞台光線のままで撮影されている。しかし照度の関係でコマ数を加減して撮影しているので、チャップリンのサイレント映画のように動きが早い。そのうえ、五十年以上も前の撮影であるためフィルムも老朽化していて、このままでは映写不能に近い。能楽は伝統芸術とはいえ、舞台演劇の宿命として変動を避け

られず、昭和に入ってから細部では変化が続いている。その変化の実態を把握するのに映画フィルムがきわめて有効であることは言うを待たない。そうした観点からも、能楽研究所では、この貴重なフィルムを今日に再生して、記録保存を図るとともに、能の演技の変遷、特に近代における変動の実態の解明をはじめとして、広く研究資料として活用することを目的に、重点事業として立案し、一九八五年から三年計画で取り組んだ。

計画の遂行につき、日本私学振興財団の昭和六十年年度の学術研究資金の交付を申請したところ、幸いにも採択され、三年間に亘って学術研究資金の交付を受け(計三二〇万円)、大学からの補助も受けることができ(計五七二万円)、特に最終年度は格別のご配慮をいただき、総計約一〇〇〇万円近い経費で、三年目の一九八七年(昭和六十二年)度に完成したのである。

2、研究計画

このフィルムは、かつて昭和四十四年十月、能楽懇談会の第三二回例会で「16ミリで故人をしのぶ」と題して、江島氏のお話もうかがいながら、保存状態のよいものを中心に映写されたことがある。そのときは、コマ送りがかなり速く、すべて駆け足の速度だった。それでも近代の名手の面影を偲ぶよすがとなっていたが、そのときからでも二十年近い年月が流れ、傷みも進んでいる。記録保存のためにも、フィルムの劣化をくい止めねばならない。そして、今後の活用を図るためには、何よりも、この埋もれた映像群を現代に正確に再生することが先決である。

江島氏は『宝生』昭和七年八月号に発表された「十六ミリの能楽撮影後感」で、

別に何も大それた目的もなく、一瞬にして消え失せる諸先生の神技を一寸捉へて置きたかったことと、能楽を映画にすることが可能かどうかを、秘かに確めて置きたかったので、別に撮影の為に照明などは変へて頂かず、観客にまぎれておシテのほか誰にも言はずに撮って居りました。ですからあの薄暗い舞台光線のまゝで、非常な露出不足は覚悟してやりました。それを補ふ第一の方法として撮影廻転速度を標準の十六齣にすることが出来ません。その為に早い動きの型がやゝぼけたこと。又映写に際して完全に原技の動きと等速度に出来ないために、位の静かなものは部分的にやゝ不自然な動きを感じた所もありました。露出不足を補ふ第二に鏡玉の開度は勿論、使用フィルム及現像操作にかなり無理があった為に、フィルム銀粒子の荒びを来たし、画の鮮鋭度を欠いたこと。

などと苦心を述べておられる。

再生作業については、株式会社イマジカ(旧東洋現像所。一九八六年一月に社名変更)技術陣の全面的協力を得、協議を重ねつつ、新しいフィルムに正確に再生することを第一とした。再生作業は、つぎの諸段階にわかれる。

- A 現フィルムの補修(検査・クリーニング等)
- B ネガフィルムの作成
- C 反転したポジフィルムの作成

- D コマ延ばしフィルムの作成(有益なものを優先する)
- E 再生フィルムの構成の検討およびシナリオの作成
- F 新しく加える説明文やタイトル等の作成・撮影、ポジフィルム編集
- G 場面に合わせて話を吹き込み、囃子やナレーションを加えてのトーキー化
- H ネガフィルム編集(音ネガ・絵ネガ編集)

3、研究経過

【整理・分類】

研究所の業務の関係から、フィルム再生の仕事は西野所員が中心になって進めることになり、まずフィルムの整理から着手した。フィルムは、ブリキの缶や紙箱に収められており、全体として密閉状態ではなかったことが幸いしたようで、それほど傷みは進んでいなかったが、なかにはボロボロになっていたものもあった。色の具合も白黒フィルムなので、それほど褪色していないということだった。ともかく今を置いて再生のチャンスはないことを痛感した。

まずはじめに、フィルムの汚れなどを取りながら整理した。各フィルムについて、演目・演者(シテ・ワキ・囃子方等)・催し名・演能年月日・場所などを調べ、小田幸子・山中玲子所員の協力も得つつ雑誌掲載の番組等で確認し、それぞれカードを作り、ほぼ内容別に分けた。その内容は五種に大別される。

①江島氏が「能楽断片・名家の面影」と名付けた近代の名手

たちの演能

- ②それに準ずる催会の記録
- ③主な所作单元を中心とする各種の「型」
- ④松本長の葬儀(昭和十年十二月二日、東京・青山斎場)・大連能楽殿舞台披露の記録(昭和十年八月)などの報道
- ⑤宝生対わんや野球大会・宝生仮装会・わんや銀座店風景等
娯楽性の強いもの

いずれも有益な資料であるが、とりわけ貴重なのが①と②で、演能の一部、しかも数分ではあるが、その迫力ある映像群は、タイトルのとおり、近代の名家の面影を伝えていて興味深い。当時の名手たちの芸や姿を、書物や先輩の言葉から想像していた西野などは、それぞれに个性的で、大きく、鮮やかな風姿に魅せられ、先輩たちの言葉が少しも誇張でないことを知った。

④も昭和十年代の能楽資料として価値が高い。松本長の葬儀は貴重な報道記録であり、満州へ向かう一行を見送る駅頭や車中でのシーンもニュース映画のようで、大連能楽殿舞台披露の記録も映像が不鮮明ではあるが珍しい記録である。⑥は当時の世相や風俗を伝える面白い記録で、思わず笑いを誘う。

【コマ延ばし】

再生作業のうちDのコマ延ばしは、前述のように、このままでは動きがかなり早いため(なかには、やや早いがこのままで行けるものも少しある)、実際の演技に近づけるための作業で、同じコマをもう一コマ(二倍)ないし二コマ(三倍)加えて延ばす

仕事である。二倍と三倍の両方を作ってテストし、イマジカ側と研究所側の表所長と西野とが、シテの演技はもちろん、囃子方の手の動きや後見の立ち居などを検討した結果、いくぶん早めながら自然に近い二倍のコマ延ばしが妥当と判断し、二倍にした。三倍にすると遅くなり過ぎ、費用も倍になる。しかも、このコマ延ばし作業は経費がかかるので、全部は行わず、有益なものを優先することにした。

こうして再生したフィルムの映写時間は約三時間以上に及ぶ。現代の技術によって埋もれていた映像群が甦った。しかし、このままでは素材にすぎない。バラバラの断片を整理・編集して、一つの作品として活用できるようにしなければならぬ。予算の枠もあり、今回はもっとも有益なフィルムを中心に行うこととし、①「能楽断片・名家の面影」と、②それに準ずる催会を主体に「名家の面影」と題し、二時間のものにまとめることにした。

4、「名家の面影」の概容

初年度と二年度は主としてA B C Dの作業を行い、同時に記録保存を旨とし、資料の活用をはかることを第一としつつ、全体の構成と編集方針を立てた。シナリオを書くに当たっては、できるだけ原フィルムを尊重し余分な修正は加えないことを心がけた。また説明のため一部ナレーションを入れることにした。初めての経験で、言い易く聞き易く、しかも分・秒単位にまとめねばならず、試行錯誤を繰り返した。

【シナリオとカット表】

イマジカの光安律夫・大鋸貴広氏のアドバイスを受けつつ、まず全体の構成を練り、ネガフィルム編集担当の川岸喜美江氏にカット表の作成を教わり、同氏から拝借したシンクロを使って各演目の尺数を計算してカット表を作成した(一部、浅見慈一君の補助を得た)。おびただしい断片から今回の再生にふさわしい演目を約五十ほど選び(後掲の演目一覽参照)、原則として、ほぼ時代順に配列した。流儀別や役者別などの配列も可能だが、同じ催しに立合いのように競演している例もあり、基本的には時間の流れのままに並べることにしたのである。

ついで各演目について、「演者名・曲名・演能年月日・催し名・会場」を記したタイトル原稿を作成。その際、曲名の字体はそれぞれの流儀の当時の謡本から採って構成し、フィルム編集担当の後藤宏幸氏に整理してもらい、ツド―工房に発注して撮影し新たに加えた。江島氏の作った旧タイトルも生かすようにしたが、数も少なく、結果的には全部に新タイトルを付けることになった。また全体を「昭和七年の映像から」「昭和八年の映像から」「昭和九年の映像から」の三ブロックに分けた。

また編集にあたっては、当時の舞台のことをよくご存じのワキ方宝生流森茂好氏には国立能楽堂で、シテ方観世流の長老とともに九十歳の鈴木一雄・山口幸徳氏には能楽研究所で、編集用のビデオ(サイレント段階)をご覧いただき、演目や催し・舞台などについていろいろお尋ねした。急なお願いにもかかわらずお時間をさいて下さったご協力に対し御礼申しあげる。

【トーカー化について】

フィルムはサイレントであるため、われわれ素人や一般にはそこがどの場面か分かりにくい。能の演技は謡と所作(型)を基本とするから、謡がないと理解しにくい。そこで鑑賞の一助ともなるように字幕がわりに場面に合わせて謡を吹き込むことにした。計画当初からトーカー化をめざしていたが、基本的な再生やコマ延ばしなどの諸作業に経費がかさみ、一時は規模を縮小することも検討したが、最終段階で、殆どの演目に謡を吹き込むことにし、観世栄夫(観世流)・近藤乾之助(宝生流)・瀬尾菊次(金春流)・豊嶋訓三(金剛流)・友枝昭世(喜多流)の各氏にお願いした。ご多忙の中、しかも急ぎの困難な作業を快く引き受けて下さり、それぞれ工夫して吹き込んでいただいたご協力に対し、心から感謝申し上げたい。

録音作業は経費節約のため、東京国立文化財研究所芸能部から高性能のテレコ(ナグラ)を借り、後藤宏幸氏の協力を得ながら二人三脚で進めた。録音のための部屋も近藤乾之助氏宅・芸能部のスタジオ・鏡仙会・イマジカなどで行った。

それにしても謡の吹き込みは難事だった。編集用にまとめたビデオテープを見ていただき、それに合わせて謡を吹き込むのであるが、原フィルムの回転数が一定していないので場面に合わせるのが難しい。比較的うまく合っているもの、無理に合わせなかったもの、不即不離といったものなど、さまざまであるが、全体の調子はまずまずと思う。

ところでトーカーに関し、何ととっても最大の困難は、フィ

ルムに音を入れるダビング作業だった。目黒にある日映録音のスタジオで行ったが、せっかくの録音を生かすも殺すもこの作業にかかっている。一分一秒たりとも無駄には出来ず、瞬時の判断が要求される。このとき殆どの演目以後藤宏幸氏のほかに役者の瀬尾菊次氏が立ち会ってくれたことは大いに心強かった。瀬尾氏にはその前段階のポジフィルムの編集にもお力をいただき、感謝の言葉もない。

新たに加えた謡のなかには、所作との関係でその場面より早く、演目タイトルを映している間(7秒)に謡が始まるものもあれば、場面は終わっているのに謡だけが余韻を残すかのように続いていくものもあって、一定しないが、それぞれに応じた処置である。慣れないダビングで緊張したが、ともかく完了できたのはミキサの福田誠氏のお力によるところが大きい。いづれにしろ、吹き込みに関する録音上の不備、画面とのずれなど、すべて製作側の責任であり、演者の責任ではない。

名手たちの技と、新しく入れた謡。サイレントのとき以上に迫りに溢れた映像になった。また一部に囃子の音をBGMとして用い、全体の導入や解説を兼ねるナレーションのナレーターは、本大学出身の声優・秋元羊介氏に頼み、その声と映像がよく調和して期待にこたえてくれた。

【オープニングとエンディングについて】

「名家の面影」は全三巻約四〇〇〇フィートに及んだ。オープニングには、日本私学振興財団と法政大学の資金によって進

め、記録保存と今後の活用をはかることなどをローリングタイトルで示し(ここはサイレント)、つぎに江島氏の晩年の写真を背景にナレーションで江島氏の紹介と撮影時の工夫などを解説し、続いて昭和七年当時の宝生能楽堂の外観や月並能での楽屋風景を入れた。野口兼資・松本長・先代宝生九郎・佐野巖ら懐かしい顔が映る。ついで江島氏が作った原タイトル「能楽断片・名家の面影」を出し、続いてコマ延ばしをしない早いままの「道成寺」のシーンと、九十八歳になられるシテ方宝生流の長老近藤乾三さんがモニターを見ているシーンを映した。フィルムの中には若き日の近藤さんの舞台もあり、近藤さん宅を訪問して、編集用のビデオを見ていただき、いろいろお話を伺い、その模様を、許可を得て特別に撮影したのである。近藤さんはご自分の舞台はもちろん諸先輩の舞台を非常に懐かしみ、モニターから目を離されない。記憶力抜群、囃子方の名前も次々とあげられ、ご自分の「善知鳥」の場面では即座に謡を歌われた。そして近藤さんと一緒に名家の面影を見るかたちでメインタイトル「名家の面影」(題字・書家の大越雪堂氏)を出し、演目に入る構成にした。大越雪堂氏、近藤さんならびに近藤乾之助ご夫妻のご協力に厚く御礼申し上げます。その近藤乾三さんが、昭和六十三年十月一日、九十八歳の誕生日を前に逝去された。心からご冥福をお祈りするとともに、今は、編集用のビデオをご覧いただいたことだけでも慰めとしなければならぬ。

なおメインタイトルにかぶせて効果音を入れた。笛一管によるほうがシンプルかつ効果的と考え、「清経」の(恋の音取)か

ら導入にふさわしいフレーズを選んだ。名手たちの魂を呼び寄せる意図もないではない。

延々と能の場面が続くのも単調になる恐れがあるので、江島氏が撮影されたフィルムのなかから昭和八年当時のわんや銀座店の風景や宝生チーム対わんやチームの野球の模様などを「昭和七年の映像から」と「昭和八年の映像から」との境に入れて、アクセントにした。そのころは野球も盛んになってきた時代で、当時の世相もうかがわれる。

なお全部に謡を吹き込んだのではなく、たとえば、一番最後の「檀風」のように、謡も囃子も一切入れず、サイレントで通し、要所要所に控え目にナレーションを入れたものもある。

エンディングには、江島尤一氏からお借りした宝生会の名手たちの集合写真を入れ、迫力に満ちた先代六平太の「頼政」のアップを出し、この映像群が今後に生かされることを願う旨のナレーションで締めくくった。

5、再生を終えて

約半世紀ぶりに甦った映像が語りかけるものは多い。あまりにも精緻になりすぎた現代の能の演技と比較するとき、氣迫に溢れ、型が大きく、それぞれ個性的で、鮮烈の一語に尽きる。名手たちが何ゆえに名手と称えられたかを雄弁に物語る映像群。魅力的で、力強く、存在感のある風姿。

撮影技術の未発達な時点で、よくぞ撮って下さったと畏敬の念を抱く。よほどの財力とハイカラ趣味とをもっていなければ

不可能であり、その両方を兼ね備えた江島氏によって、これらの映像が残された幸運を思わずにはいられない。それにしてもわずか五十年前の演能ながら、こんなにも鮮烈であるのは何によるのだろうか。名手たちが五十代から六十代にかけての年盛りの芸位にあったことも確かであるが、何がこのような違いを生んだのだろうか。早急には答えは出せないが、名手たちが育った時代の技の伝承の問題や行住坐臥の精神のありよう、目の肥えた観客の存在などと深くかかわっているように思われる。

こうした問題も含めて、この映像群は、演者と鑑賞者双方にとって、現代の能の方向を考えるうえで、大きな力となるであろう。

昭和六十三年二月二十二日、完成と報告を兼ねて、能楽関係者約二〇〇名を招いて国立能楽堂で試写会を開いた。映写に当たっては国立能楽堂のご配慮をいただき、五月十日には学内で映写会を開き約二〇〇名が参加、ともに好評を博した。映写機の操作は両日ともに国立能楽堂の印藤英明氏の協力を得た。

なお、試写会当日、江島弘志氏から、全然別の函に入っていたという、行方不明の「芭蕉」と「鞍馬天狗」のフィルムの提供があり、早速追加の再生作業を施したことも、付言しておきたい。試写・映写会とも質疑応答やアンケートでご意見・ご感想をうかがい、後日、送っていただいた方もいる。寄せられたご意見の一二を紹介すると、山木ユリ氏は、

名を聞いただけ、あるいは不確かな記憶しかなかった昔の名人の方々をかくも網羅し、こんなにたくさん曲を観せ

て頂いて感激しています。謡が入ってはじめてわかる場面も多く大助かりでした。まるで場面をみながら入れたように、ずればあっても随分苦心されたことでしょう。謡が効果を発揮している場合も、芸位の隔たっている場合も、それなりに面白く興味が持てました。

後見が小走りといった工合でしたからかなり早いわけですが演じられていくリズム・メリハリは伝わり誠に貴重でした。間が絶妙でした。

山姥(兼資)の足拍子、松本長の後に廻って行く背に満ちているもの、巴(六平太)の坐って長刀を置く一瞬の呼吸、羽衣、角田川(金太郎)の立姿、笹の使い方も面白く、壇風の迫力——いずれも濃い内容に驚き入りました。心から楽しませて頂きました。製作上の御苦労と演能上の貢献の重さを思い感激しています。(以下略)

と記され、波多江有香氏は、

(略)数人を除いては後年の舞台は大方拝見している演者たちですが皆若々しく、潑刺としたものを感じます。今次大戦前夜のような時期、みなさんの様な気持で居られたのでしょうか。舞えなくなる危機の迫っている時機ですね。感じたことを並べさせて頂きますと、

。先づ型が大きく、過剰な *sensibility* を余り感じないことがとても古格を思い出させました。

。写真の知識が皆無なので困りますが16mmからの画面としてフィルムの *sensibility* に感心しました。

。謡も合わせてる——ということをそれほど気にしなくてよいほどのできだと思えますし、はやしも同感です。

。歩びがもう少し緩んで欲しいと申しては、望蜀の慾ばりになりませうか。(以下略)

という感想を寄せられた。松野秀世氏も詳しい感想を寄せられ、諸家の往年ことに最も壮んな頃の姿が残されたこともあり、充分に今後の手本にもなり得る。充実感の源は基本の習練がしっかり行われて、型を端的に強く示している様子が知られる。(略)政吉・長・万三郎・六平太諸師の装束の付きに共通した姿のふくらみがあるのは、壮年期の押出しか。

(以下略)

などと細かく観察されている。ほかにも大変貴重なご意見が多く、あらためて御礼申しあげ、今後の研究に生かしていきたいと考えている。

なお六月十日、NHK・教育TV、ETV8の文化ジャーナルで紹介され一部を放映した。また九月二十三日のNHK・教育TVの祭日放送ではもっと時間を延長して放映された。いずれも担当の西野が出演し、解説した。

最後に、最終年度は時間不足から、かなり無理をしなければならず、関係各位にご迷惑をおかけしたことを心からお詫び申しあげるとともに、各位の献身的なご協力・ご助言がなくては、この仕事は完成しなかったといつてよく、衷心より深く感謝申しあげ次第である。

江島伊兵衛氏撮影能楽フィルム

「名家の面影」演目一覧

〔昭和七年の映像から〕

1 梅若万三郎〈芭蕉〉

(7・5・26 梅若研能会月並能 高輪・梅若能楽堂)

シテ梅若万三郎 ワキ青木只一。笛杉山立枝 小鼓大倉宣利 大鼓斎田喜一郎(以下、囃子方は笛・小鼓・大鼓・太鼓の順に記す)。

2 喜多六平太〈鞍馬天狗・白頭〉

(7・3・29 朝日能初日 朝日講堂)

シテ喜多六平太 ワキ野島信 ワキツレ古川順之助・野口友弥 子方(牛若)喜多長世・(稚児)梅津芳文・高木香一・喜多節世 アイ多々良外茂三・多々良登。一噌又六郎 瀬尾潔 川崎安雄 金春惣右衛門。

3 野口兼資〈三山〉

(7・4・10 宝生会月並能 宝生会能楽堂)

シテ野口兼資 ツレ佐野巖 ワキ松本謙三 ワキツレ藤田正信・唐沢時司 アイ柳田巖吉。一噌英二 幸悟朗 高安鬼三。地謡*松本長(*印は地頭)・桐谷正治・瀬尾要・三川清・朝倉六郎・榎本秀雄・本間照・畑富次。

4 近藤乾三〈夜討曾我〉 (同 右)

シテ近藤乾三 ツレ武田友孝・高橋進・近藤礼 立衆桐谷

- 貞治・加藤秀治・田中幾之助・林弘 アイ山本晋・正木辰雄。三谷良馬 中野宮三 近藤季雄。地謡*宝生重英・瀬尾要・三川清・野村諭・斎藤篤・田部井啓三・川上陽通・小林清太郎。
- 5 松本 長〈松風〉
(7・4・24 宝生会春別会 宝生会能楽堂)
シテ松本長 ツレ ワキ松本謙三。島田已久馬
幸悟朗 高安鬼三。
- 6 武田喜男〈小鍛冶〉
(7・5・8 宝生会月並能 宝生会能楽堂)
シテ武田友孝(喜夫改メ) ワキ光本弥一 ワキツレ藤田正信 アイ佐野平六。藤田大五郎 青木直七郎 川崎利吉 松村隆司。地謡*宝生重英・高橋進・近藤礼・三川清・榎本秀雄・大浦嘉門・本間熙・小林麟一。
- 7 宝生重英〈盛久〉(7・3・29 朝日能初日 朝日講堂)
シテ宝生重英 ワキ宝生新 ワキツレ光本弥一 アイ小早川清士。寺井政数 幸悟朗 中村慶作。
- 8 野口兼資〈山姥〉
(7・6・12 宝生会月並能 宝生会能楽堂)
シテ野口兼資 ツレ三川清 ワキ宝生新 ワキツレ藤田正信・唐沢時司・森茂好 アイ山本晋。加藤賢吉 中野宮三 安福春雄 柿本豊次。地謡*松本長・桐谷正治・武田喜男・瀬尾要・増田喜太郎・斎田光正・畑富次・木村欽治。
- 9 宝生重英〈半部〉 (同 右)
- 10 近藤乾三〈善知鳥〉 (同 右)
シテ近藤乾三 ツレ佐野巖 子方前田忠弘 ワキ光本弥一 アイ柳田巖吉。一噌鉄二 森重朗 近藤季雄。地謡*宝生重英・瀬尾要・高橋進・近藤礼・小林麟一・朝倉六郎・小林清太郎・田部井啓二。
- 11 喜多六平太〈藤戸(仕舞)〉
(7・6・27 特別上演 喜多能舞台)
喜多六平太 地謡 金子五郎・友枝喜久夫
喜多 実〈邯鄲〉(7・6・11 学生鑑賞能 九段能楽堂)
シテ喜多実 子方喜多長世 ワキ宝生新。寺井政数 森重朗 安福春雄 松村隆司。
- 12 喜多六平太〈羽衣〉 (同 右)
シテ喜多六平太 ワキ宝生新。一噌又六郎 瀬尾潔 亀井俊雄 金春惣右衛門。
- 13 喜多六平太〈頼政〉(7・6・27 特別上演 喜多能舞台)
シテ喜多六平太
安福春雄。地謡 金子五郎・友枝喜久夫ほか。
- 14 喜多 実〈熊坂〉 (同 右)
シテ喜多六平太
安福春雄 金春惣右衛門。地謡 金子五郎・友枝喜久夫ほか
- 15 喜多 実〈熊坂〉 (同 右)

《以上第一卷》

- か。
 16 喜多六平太〈巴〉 (同 右)
 シテ喜多六平太
- 17 松平藻海〈小督〉 (7・10・23 染井能会 染井能舞台)
 シテ松平藻海 ツレ野村論・林弘 ワキ宝生新。藤田大五郎 中野宮三 久米桂一郎。
- 18 本間広清〈葵上〉 (7・2・21 慈善能 宝生会能楽堂)
 シテ本間広清 ワキ松本謙三。藤田大五郎 瀬尾潔 塩田武夫 戸田松里。
- 19 松本 長〈籠太鼓〉 (7・7・10 宝生会月並能 宝生会能楽堂)
 シテ松本長 ワキ宝生新 アイ野村万造。寺井政数 北村一郎 川崎利吉。地謡*野口兼資・桐谷正治・近藤礼・波吉外次・高橋徳之・木村欽治・畑富次・本間照。
- 20 野村万介・萬斎〈悪太郎〉 (同 右)
 悪太郎 野村万介 念仏僧 野村萬斎 伯父 市川七作。
 野口兼資〈藤栄〉 (7・9・11 宝生会月並能 宝生会能楽堂)
 シテ野口兼資 ツレ近藤礼・加藤秀治・桐谷貞治(他二人)
 子方米倉義勝 ワキ宝生新 ワキツレ藤田正信 アイ正木辰雄・山本晋。一噌鉄二 北村一郎 中村慶次郎 松本隆司。地謡*松本長・桐谷正治・高橋進・武田喜夫・斎藤篤・毛利辰吉・川上陽通・畑富次。
- 21 22 宝生重英〈富士太鼓〉 (同 右)
 シテ宝生重英 子方前田忠弘 ワキ松本謙三 アイ柳田巖吉。島田已久馬 幸悟朗 高安鬼三。地謡*松本長・桐谷正治・瀬尾要・波吉外次・大浦嘉門・河合定彦・朝倉六郎・矢野正吉。
- 23 近藤乾三〈殺生石〉 (同 右)
 シテ近藤乾三 ワキ光本弥一 アイ柳田巖吉。三谷良馬 森重朗 安福春雄 柿本豊次。地謡*宝生重英・瀬尾要・高橋進・三川清・増田喜太郎・高橋徳之・榎本秀雄・小林麟一。
- 24 宝生重英・英雄〈望月〉 (7・9・20 宝生会臨時能 宝生会能楽堂)
 シテ宝生重英 ツレ佐野巖 子方宝生英雄 ワキ宝生新 アイ山本晋。一噌又六郎 森重朗 高安鬼三 松村隆司。
 《以上第二卷》
- 25 金春栄治郎〈小袖曾我〉 (7・9・28 朝日能二日目 朝日講堂)
 シテ金春栄治郎 ツレ野村保・高瀬寿美 トモ早野隆太郎・中川四郎 アイ柳田巖吉。一噌鉄二 青木直七郎 安福春雄。
- 26 桜間金太郎〈角田川〉 (7・10・26 金桜会 細川舞台)
 シテ桜間金太郎 ワキ宝生新。一噌又六郎 北村一郎 川崎利吉。
- 27 梅若万三郎〈安宅〉

- (未詳。あるいは8・3・21の観世紅雪追善能か。シテ梅若万三郎 ワキ宝生新。寺井政数 幸悟朗 高安鬼三)
- 28 宝生重英〈道成寺〉
(7・10・30 宝生会別会 宝生会能楽堂)
シテ宝生重英 ワキ宝生新 アイ山本晋。一噌鉄二 瀬尾潔 安福春雄 金春惣右衛門。
- 29 観世左近〈花筐—筐之伝〉
(7・12・2 岩倉具視公五十年祭報恩能 九段能楽堂)
シテ観世左近 ワキ宝生新。一噌又六郎 森重朗 川崎利吉。
- 30 野村万斎〈口真似〉 (同 右)
シテ野村万斎 アド野村万造・野村万介。
- 31 梅若万三郎〈葵上〉(月日未詳 梅若会)
- 32 金剛右京〈葵上—替之型・無明之祈〉
(7・3・19 能楽協会能 九段能楽堂)
シテ金剛右京 ワキ松本謙三。島田已久馬 亀井俊雄 金春惣右衛門。
- 〔昭和八年の映像から〕
- ☆わんや書店(銀座店)
- ☆野球——宝生チーム対わんやチーム(8・4・29)
- 33 宝生重英〈翁〉(8・1・8 宝生会初会 宝生能楽堂)
翁 宝生重英 千歳 宝生英雄 三番三 山本東次郎 面箱
高井則安。島田已久馬 中野栄三 川崎安雄。
- 34 金剛右京〈花月〉(8・2・11 能楽協会能 九段能楽堂)
シテ金剛右京 ワキ古川順之助 アイ高井則安。三谷良馬 森重朗 近藤季雄。
- 35 金春光太郎〈景清〉 (同 右)
シテ金春光太郎 ワキ野島信。寺井政数 幸悟朗 川崎利吉。
- 36 梅若万三郎〈菊慈童〉(舞囃子) (同 右)
梅若万三郎 一噌又六郎 北村一郎 高安鬼三 観世元継。
梅若万三郎〈道成寺—次第三遍返・中之段数拍子崩〉
(8・4・22 万三郎復帰能 宝生会能楽堂)
- 37 シテ梅若万三郎 ワキ松本謙三 アイ山本東次郎。地頭観世織雄 鐘引観世左近 後見観世鉄之丞・鈴木亥三郎。
一噌又六郎 大倉喜太郎 高安鬼三 金春惣右衛門。
- 38 宝生重英・英雄〈石橋—連獅子〉
(8・5・28 宝生嘉内追善能 宝生会能楽堂)
シテ(親獅子)宝生重英 (子獅子)宝生英雄 ツレ高橋進
ワキ松本謙三。一噌又六郎 幸悟朗 川崎利吉 金春惣右衛門。
- 39 桜間金太郎〈安宅〉(9・6・20 金春普及能 朝日講堂)
シテ桜間金太郎 同山 桜間伴雄・高瀬寿美・桜間龍馬・渡辺喜彦・中川四郎・守屋与四巳・江島俊吉 ワキ宝生新
アイ柳田巖吉。島田已久馬 森重朗 亀井俊雄。
- 40 桜間道雄〈石橋〉 (同 右)
シテ桜間道雄 ワキ光本弥一 アイ山本晋。藤田大五郎

- 41 中野營三 安福春雄 金春惣右衛門。
梅若万三郎〈安達原・黒頭・急進之出〉
(8・6・17 同友会 九段能楽堂)
シテ梅若万三郎 ワキ松本謙三 アイ野村万造。加藤賢吉
青木直七郎 中村慶作 柿本豊次。
42 観世左近・梅若万三郎〈蟬丸替之型〉
(8・9・27 四流聯合演能大会 朝日講堂)
逆髪 梅若万三郎 蟬丸 観世左近 ワキ野島信 ワキツレ
野口友弥・富山喜一 アイ多々良外茂三。一噌鉄二 鵜沢
寿 高安鬼三。
43 喜多六平太〈国栖〉
(8・9・28 四流聯合演能大会 朝日講堂)
シテ喜多六平太 前ツレ金子五郎 後ツレ友枝喜久夫
子方喜多節世 ワキ松本謙三 ワキツレ山崎香吉・唐沢時
司 アイ正木辰雄・辺見大喜。寺井政教 中野營三 瀬尾
乃武 金春惣右衛門。
44 金剛右京 仕舞〈融〉 (未 詳)
45 松本長 舞囃子〈天鼓〉 (未 詳)
〔昭和九年の映像から〕
46 梅若景昭〈花籠〉(袴能)
(9・7・8 梅若会定式能 梅若能楽堂)
シテ梅若景昭 子方梅若景英 ワキ小泉信吾。
- 47 梅若景昭〈野宮〉
(9・10・21 梅若会定式能 梅若能楽堂)
シテ梅若景昭 ワキ小山健太郎
48 喜多六平太〈葵上〉
(9・9・18 四流聯合演能大会 朝日講堂)
シテ喜多六平太 ツレ友枝喜久夫 ワキ松本謙三 ワキツ
レ光本弥一 アイ速見大喜。一噌鉄二 幸内次郎 加藤
良助 松村隆司。
49 松本長・松本謙三〈檀風〉
(9・10・26 下掛宝生会能 松本謙三後援会
宝生会能楽堂)
シテ松本長 ワキ松本謙三 ワキツレ(本問)宝生新 興昇
山崎香吉・森茂好。

* 調査不足のため不備も多く、各位のご教示をお願い申しあげ
る。特に当時の番組などお持ちの方はお知らせいただければ
有難い。

《以上第三卷》

〔文責・西野 春雄〕